

千葉大学とカリフォルニア大学サンディエゴ校が 「治療学」共同研究拠点設置



CHIBA UNIVERSITY
CHIBA UNIVERSITY



UC SAN DIEGO HEALTH SCIENCES

UC San Diego
SCHOOL OF MEDICINE

日米の最先端の知見を結集し、感染症やアレルギー、ガンも克服する“夢のワクチン”の開発が始まった。研究拠点は千葉大学がこの4月に設置した「千葉大学—UCSD(カリフォルニア大学サンディエゴ校)国際粘膜免疫・アレルギー治療学研究センター」。10年後を目途に新治療法の開発を目指す。

世界初の次世代型 粘膜ワクチン

新型インフルエンザやエイズなどの感染症や、花粉症、食物アレルギーといった疾患は、有効な治療法が確立されていない。現在の注射型ワクチンでは重症化を押しとどめるだけで、体を感染から完全に守ることは不可能なのが現状だ。アレルギー性疾患も根本的な治療法はないに等しい。千葉大学とUCSDが目指すのは、病原体の感染そのものを防止する、病気にからない「世界初の次世代型粘膜ワクチン」だ。研究の第二線に臨む植松智粘膜免疫学教授は「感染症のほとんどは気道や腸管などの粘膜面から病原体が侵入し、アレルギーも粘膜組織で主に発症します。そこで自然免疫細胞の機能の全容を解明した上で、安全かつ強力に免疫活性化を図ることで病気にからないワクチンが可能になる、というのが基本的な考え方。いわば病原体などを侵入部位でブロックする水際作戦といえます」と説明する。

研究拠点の千葉大学—UCSD国際粘膜免疫・アレルギー治療学研究センターは、日米二つのセンターからなる。千葉大亥鼻キャンパスにある千葉リサーチセンターのキーパーソンは、アレルギー疾患治療の専門家、中島裕史教授。千葉大UCSDキャンパスに位置づけられるサンディエゴリサーチセンターのキーパーソンは清野宏・東京大学医科学研究所教授兼千葉大教授。両教授がそれぞれのセンター長として国際共同研究をリードする予定だ。

中島教授によれば、開発・実用化までのロードマップは、「まずは感染症などの予防ワクチンの研究、3年後を目途にアレルギー疾患の研究へと進み、基礎研究は計6年間。10年後には新治療法を確立させる計画です」と話す。

世界最高水準の治療学研究拠点を狙って



徳久剛史 学長

千葉大学では、強みとなる独創的な研究分野を戦略的に支援することにより、世界最高水準の研究拠点形成と卓越した若手研究者の育成を目指しています。このたびのUCSDとの共同研究拠点では、新しい治療学分野での医療イノベーション創出と、日米共同の大学院教育により世界をリードする若手研究者の育成を行います。

→ News



文部科学省の支援のもと 両校の調印式が実現

千葉大学は2016年3月14日、UCSDと共同教育研究契約を締結しました。UCSDの副学長・医学部長のDavid Brenner教授と千葉大学の副学長・医学部長の中山俊憲教授が調印を行い、文部科学大臣補佐官の鈴木寛教授(写真後列右)も同席しました。

「病気にからない予防ワクチン」開発へ

異分野融合、産学連携 強化で実用化へ

研究体制は、強力かつ世界に例を見ないユニークなものだ。千葉大学は免疫学・アレルギー治療学で、UCSDは粘膜免疫分野で世界有数の研究者を擁し、ノーベル賞受賞者も輩出している。日米の最先端の知見が結集し、実用化に向けてはコンピュータ・サイエンスなど異分野の知見を融合させ、産学連携を今後広く呼び掛けて強化していく。本プロジェクトの統括責任者である千葉大学副学長の中山俊憲・免疫発生学教授は「グローバル人材育成のため、本学を中心に国際研究ネットワークを形成し、日米で若手研究者の交流も図り、3年後には日米共同大学院プログラムも開始します。粘膜免疫の基盤研究を促進し、臨床への応用と同時にグローバル人材育成を行う体制は、世界に類例がないと自負しています」と語る。

「病気にからない予防ワクチン」が完成すれば、健康長寿の可能性が高まり、世界で10億人以上が苦しむデング熱などの「顧みられない熱帯病」(NTD)克服の道も拓かれるはずだ。世界の健康増進と生活の質の向上への挑戦に注目したい。



左から千葉大学医学部の中島裕史教授、同大学副学長・医学部長の中山俊憲教授、医学部の植松智教授

広告

企画・制作=日本経済新聞社
クロスメディア営業局



CHIBA
UNIVERSITY

千葉大学 <http://www.chiba-u.ac.jp/>